

女子美術大学

「平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信

素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

平成 21 年度活動報告サイト PDF 版

女子美術大学 教育研究事業部

Copyright 2008 JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved

本 PDF ファイルに掲載の画像および文章を無断で複写・複製などの二次利用することを禁じます。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

もくじ

<http://www.joshibi.net/brand>

プログラムについて

もくじ	2	M. 環境マッププロジェクト	37
平成 21 年度プログラム活動報告	3	N. 環境ポスターコンペプロジェクト	39
A_ 紙プロジェクト	4		
B_ 絵具（顔料）プロジェクト	7		
C_ パラ・プロジェクト	10		
D_ 素材ミュープロジェクト	12		
E. デザインミュープロジェクト	13		
F. 注染プロジェクト	15		
G. 糸が結ぶセルビアと日本	17		
H. 環境論 +	19		
I. にこぶん	23		
I-1. オーストリッチーズ	26		
I-2. わたけん	27		
I-3.GM	29		
J. 壁塗りプロジェクト	30		
K. 素材環境教育プロジェクト	31		
L. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション	33		

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

平成 21 年度プログラム活動報告

<http://www.joshibi.net/brand>

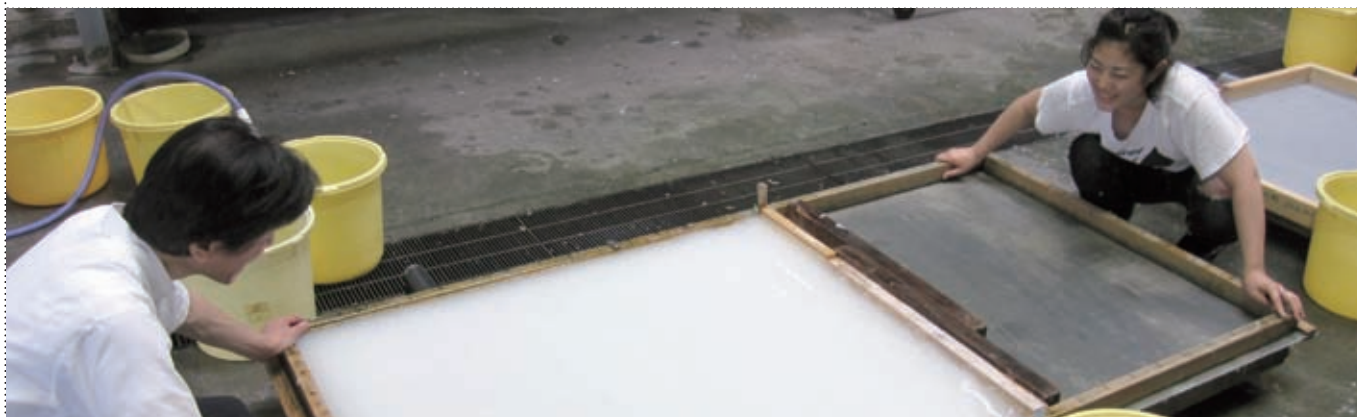


これまでの取組から継続、発展してきたプロジェクトも含めて、平成 21 年度に活動のあったプロジェクトを紹介します。

- A. 紙プロジェクト
- B. 絵具（顔料）プロジェクト
- C. バラ・プロジェクト
- D. 素材ミュープロジェクト
- E. デザインミュープロジェクト
- F. 注染プロジェクト
- G. 糸が結ぶセルビアと日本
- H. 環境論＋
- I. にこふん
 - I-1. オーストリッチーズ
 - I-2. わたけん
 - I-3.GM
- J. 塗壁プロジェクト
- K. 素材環境教育プロジェクト
- L. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション
- M. 環境マッププロジェクト
- N. 環境ポスターコンペプロジェクト

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

A_ 紙プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中

参加学生：絵画学科洋画専攻版画コース・絵画コース・デザイン学科

担当教員：絵画学科洋画専攻 馬場章

場所：本学相模原キャンパス・紙漉場、北側畑、相模原地域

■プロジェクトの概要

「紙のプロジェクト」は「紙漉き」を通じ、紙について学習することを目的に、「紙の歴史」「身近な植物繊維から紙を作る」「紙を使ったデザイン」「紙漉きに関する指導法」の項目からなっています。

■成果

1. 女子美術大学附属中・高等学校にて体験学習として紙漉きを行いました。

日時：7 月 22 日・24 日

場所：女子美術大学附属中学・高等学校 6 号館地下

参加人数：中学 1 年生・中学 3 年生、高校 2 年生・高 3 年生 合計 15 名

参加学生：大学院 2 名、学部生（版画コース）2 名

【内容】

- ・生活廃材の綿ボロから絵の描ける紙を作る。
- ・和紙の漉き方を体験する。
- ・紙の用途について考え、その目的に合った紙を漉く。（今回は水彩用紙）

【事前活動】

実施日の一週間前に各生徒の家庭から集めた綿の古布を 5cm 四方に細かく刻み、相模原に送ってもらい白い布と色着きの布 2 種類を用意しました。布の色ごとに苛性ソーダ 30% の液で 3 時間ほど煮て、糊分や染料を分解して洗浄。白色の布、色着きの布からホーランダーピーターで細かくして繊維化、それぞれ 3 時間を要しました。色が抜けきれていないため、くすんだピンク色の原料となりました。



相模原校地での三桠栽培



女子美術大学附属中学校・高等学校にて紙漉き体験学習を実施



生徒が集めた綿の古布を、大学で繊維化した材料・叩解 60 分後

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

A_紙プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>**【実施】**

・7月22日

付属中学・高等学校で「紙漉き体験学習」を実施しました。（大学院ティーチングアシスタント2名、学部生2名参加）

白い原料から、溜め漉きの方法で厚みのあるA3版の紙を漉く。漉いた紙はすぐに脱水し、つるして乾燥する。同じ方法で色着きの紙をA3版の大きさに漉く。学部生が生徒をアシストしてそれぞれ1時間ほどで全員が漉き終わりました。その後だいぶ慣れてきたので、はがき大の紙を自由に漉いてみました。原料があるだけ漉き、乾燥は平らなものだけでなく、校舎の壁などにも張り着けてみるなど、マチュールのある紙の作成も体験しました。

・7月24日

和紙を漉く。洋紙の溜め漉きと異なり和紙の流し漉きは、少し技術を要するため生徒と学生が組んで紙漉きをおこないました。原料は楮。原料を水に分散させ、ネリを加えるところから体験しました。

漉きの基本動作を確認するため、参加学生が手本としてひととおり「流し漉き」の作業をデモンストレーション、その後漉き舟を2つ用意して、それぞれにティーチングアシスタントと参加学生がついて水の汲み込みまでを手伝ったのち、ゆすりは生徒たちに自由に体験してもらいました。ほとんど生徒は失敗も無くすぐに慣れ、漉いた紙は、薄いテトロン（布）の上で脱水し、窓ガラスやケースのガラスに張って乾燥。慣れてくると高校3年生はひとりでも紙を漉くことができるようになりましたが、下級生には少しアシスト（水の汲み込みの時）が必要だった様子です。

最初の日に漉いた洋紙に、にじみ止めのドーサをほどこしました。乾ききっていないものは、アイロンをかけ乾燥してからドーサを打つことができました。

紙のテキストを配布して読んでもらいましたが、専門的過ぎたのか下級生には少し理解が難しい内容だった様子です。最後に附属高校の教員がアンケートを用意、学生は参加した生徒たちから体験を通じた意見を取材し、それぞれ生徒の感想やレポートにまとめ今後の活動に活かされる良い資料となりました。

【結果】

生徒たちにとって、言葉による説明だけでは把握しきれなかった紙漉きのしくみや流れも、実践することですぐに理解できたようです。日頃の実技経験からか、目で学習する（他の人がやっていることを観察して自分の経験に繋げる）ことに慣れており実践への戸惑いは感じられませんでした。



紙漉き体験の順番を待つ



和紙の流し漉きを体験



ガラスにローラーで貼り付けて乾燥する



大学の設備・機材を用いて大判の楮（こうぞ）紙を漉く

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

A_紙プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

最初は学生のアシストが必要だったものが、2 回目からはほとんどの生徒が自分自身で紙を漉けるようになりました。自分ひとりで漉けることで達成感がより高まっている様子が伺え、遊び感覚で、実用に耐える紙が簡単に漉けることが体得できた結果となりました。

2. 大学でのワークショップ

日時：7 月 19 日・20 日

教育 GP に参加する学生が一定の技能を身に付けることを目的に、講師に『阿波紙ファクトリー』の藤森洋一氏を招き女子美術大学紙漉き工房でワークショップを開講しました。具体的には、大学の設備・機材を用いた大判の和紙漉きの技術を習得（道具のセッティングから原料の濃度および漉き方の技まで）し、学生でも職人並みの和紙を漉けるようになることを目標としました。その結果、ワークショップ以前は設備は整っていたもののなかなか完全といえる大判の和紙が漉けませんでした。漉き舟の高さ、枠の高さや支点の位置の調整、ネリの濃度の調整などの指導を受けたことでほぼ完全な技術を習得するまでに至りました。今回の経験で、学生自らがある程度大判和紙を漉くことが可能となったことは大きな収穫でした。

3. 阿波紙ファクトリーでの研修視察

期間：9 月 2 日～6 日

徳島の工房で研修を行いました。

研修目的は、紙漉プロジェクト企画の子供達に紙漉を体験させる講座で指導するために、専門の技術を修得する事。基礎知識とその応用を学ぶため、職人の紙漉き技術を視察しました。

日本では珍しい竹繊維と楮繊維をブレンドした紙の大判水彩紙の手漉きを特殊な漉き枠を借りて体験することができました。その他に、藍染め紙、染めた繊維での漉きがけの技術を体験しました。

学生は、専門家の指導の元に大学では行えない実作業を体験し、日頃の紙漉きの知識と現場での知識がつながったことで新しい展開が見られました。同時に、機械漉き和紙の機械を 1 台開放していただき、原料のブレンド比を変えた数種類の試験紙を漉きました。特に大学での素材実験で得たデータを基に、楮繊維と雁皮繊維をブレンドして試験的に機械漉きを行ったことは有意義でした。阿波紙ファクトリーには、研修後も原料のブレンドや方法を変えて試験を実施していただき、3 月までに幾種かの紙を漉いていただくことになりました。3 月中旬に試験紙が大学に届き、学生がドーサ引きして刷りの実験を行いました。



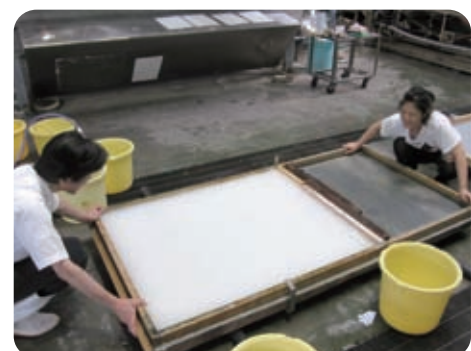
藤森氏の指導で学生も大判和紙を漉くことが可能になりました



徳島・阿波紙ファクトリー



竹と楮の繊維紙や数種類のブレンド比の違う試験紙を漉きました



特殊な漉き枠を借り、大判水彩紙の紙漉を体験する

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中
参加学生：絵画学科日本画専攻ほか
担当教員：絵画学科日本画専攻 橋本信
場所：本学相模原キャンパス、その他相模原地域

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、本学の岩絵具を中心とした顔料研究を、環境というキーワードで整理発展させながら、制作活動や、学生によるワークショップ・展覧会につなげ、学生の環境問題に関する意識の向上・問題解決・実践力を養うことを目的としています。

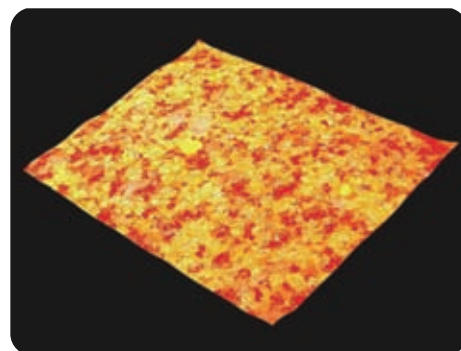
■成果

教育用目的で「エコ岩絵具 21」という名称の環境への負荷が従来品に比べ低い岩絵具を開発し、日本画の授業や特別授業・サービスラーニングにて学生に適当量の絵具が作り出せるよう工夫した行程で、岩絵具を製造してきました。それを使い、各自が作品制作を行うと共に、本年は社会福祉法人「すずらの会」の協力を得て学生主体のワークショップを行い、学び教えることを体験しました。従来、市販の日本画岩絵具は、専門家用の絵具として開発されており環境への問題・安全性などにおいて多少の問題を含んでいました。学生は、それらについての意識を深めるとともに、多くの人とこの伝統的な画材の楽しさを共有出来ることを知り、また、画材と環境について考えることになりました。

1. 素材実験の実施

昨年までの研究・実験成果の上に、造粒岩絵具については、学生の実験製造が容易な分量の製造を可能にし、よりよい分散・造粒方法の検討とほぼ解砕機を必要としないで製造可能な方法について検討しました。また、バラの色素の造形素材としての利用を考え展覧会を行いました。

まず、造粒機を使い 1 色 300 から 500g の岩絵具を製造してゆきました。



エコ岩絵具 21 の混色顕微鏡写真



顔料プロジェクトの手法によって実験製造する特別授業



サービスラーニングでの岩絵具制作の様子

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshihi.net/brand>

使用の造粒機に対する処方、担当教員（橋本・尾藤）により調整されたもので、使用の担体及び色材は、安全性の高い「FDA* 登録顔料」を中心に使用しました。

顔料プロジェクトで使用する岩絵具の研究は、大きな造機で製造できるように教員サイドでの研究が進み、特許出願とともに日本画絵具の小売店で「環境に優しい岩絵具」教育用として販売されています。特別授業として日本画の学生を対象に、教員の開発した簡易な方法で顔料プロジェクトで使われている安全性の高い顔料の実験製造を行うと共に、それぞれの制作に活かしていきました。

* FDA（Food and Drug Administration）食品医薬品局の略称で消費者が生活で接する機会のある製品について安全性に基づきその許可などを行うアメリカ合衆国の政府機関。

2. 問題解決ワークショップ等に取り組む学生プロジェクト活動展開**2-1. 学生作品への造粒岩絵具「エコ岩絵具 21」利用の為の特別授業。**

日本画：2 年素材研究 日本画ゼミ 3 年日本画ゼミ 4 年卒業制作学生
（合計約 100 名参加）

2-2. サービスラーニング日本画ワークショッププロジェクト（2 名参加）

社会福祉法人すずらの会、障害者福祉サービス事業所グリーンハウスにおけるワークショップを学生が計画し、11 月 7 日に「はじめての日本画体験」ワークショップを実施しました。2 名の学生が指導者として参加し貴重な体験を得る事ができました。初めての材料に参加したみなさんも真剣な面持ちでしたが、指導のもと本格的な岩絵具を自由に使って、味わいのある作品が完成しました。

3. バラで出来たものたち展

サービスラーニングとして、5 月に「バラで出来たものたち展」推進チームを募集し、バラを使って色素の抽出などを行いました。抽出した素材を使った展覧会が開催されました。（バラ・プロジェクト）

方法は、教員が平成 12 年にまとめた方法を基本に乾燥粉体を使い抽出しました。カッターミル、グラインダーミルを使い粉碎し、絞り機を使い濃縮しました。以前の方法では、最初にエタノールを多く使用しましたが、今回は不馴れな学生も多かったためエタノールの使用は減らしました。退色などを遅らす為にタンニンなどを多く含まないようにするためには、エタノールやそれらを遠心分離機でなるべく純粋にすることが重要と思われましたが、今回の濃縮液には最終段階での腐敗防止に利用するだけにしました。



日本画の学生を中心に行われた岩絵具制作の特別授業



「はじめての日本画体験」（社会福祉法人すずらの会）



「はじめての日本画体験」（社会福祉法人すずらの会）



「はじめての日本画体験」（社会福祉法人すずらの会）

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>**3. その他**

相模川でふるいを利用し 3~5mm の石を採集し、モザイクなどの造形素材としての利用を考察しました。採取した石に混ざった青や緑色のものは鉱物です。磨彩する絵の具としての面白さを再確認することができました。また、「もみじ」の紅葉した葉から赤い色素を取り出す実験を再度行いました。同様の方法で落葉して茶色くなったものとの比較も行いました。

■今後（22 年度）活動について

素材と環境展に向けた取り組みとして小石のモザイクなど造形素材の開発と利用、「エコ岩絵具 21」の利用・普及などを行っていきます。

また、本プロジェクトであげた、理科教育と連携する試みについては、平成 23 年度より県立相模台高校と共同で「芸術と科学」と称する授業の取組を開始する方向で検討中です。内容には、モノと表現・素材と表現を考えるひとつの要素として本プロジェクトの成果も取り入れる予定です。



ワークショップ作品例



相模川河原での採集

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

C_バラ・プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 16 年 4 月～継続中

参加学生：絵画学科日本画専攻 ファッション造形学科ほか

担当教員：絵画学科日本画専攻 橋本信 ファッション造形学科 小倉文子

場所：本学相模原キャンパス、旧古河庭園内旧古河邸、本学美術館 JAM ロビー

■プロジェクト概要

駒込の旧古河庭園内旧古河邸で 9 月 27、28 日に行った展覧会を中心に、7 月のオープンキャンパス・11 月の本学美術館（JAM）ロビーでの準備・展示を執り行いました。旧古河庭園内大谷美術館での展覧会では、27 日パフォーマンスショーも開催され盛況でした。

■成果

教員の指導によって 6 つの学科専攻の学生 27 名の推進チームは、バラの花びら・茎・葉を原材料にして花びらの色素・粉碎粉・茎の繊維・炭化による造形素材を作り出しました。主に額縁にそれらの造形素材を用いることを条件にして作品を制作しました。推進チームは、原材料から扱い、展覧会の準備・運営にも関わりました。身近な原材料から様々な造形素材をつくることで普段は既成の造形素材を扱っている学生が、原材料についての意識を高め、素材と環境の関連について考え・体験する機会となりました。学生は、「地面に撒いたとしても無害であるし、抽出後の花卉のカスなどは、肥料にまぜて花壇に使うこともできる…アートの世界でも「エコとは何か」を考えるべきだ」と様々な考えを持った様子でした。推進チームは、主に乾燥花びらをカッターミル（乾式）とグラインダーミル（湿式）で粉碎し圧搾と加熱濃縮・凍結乾燥による濃縮などを行い色素を濃縮し色材とした。また、紙粘土・炭なども制作しました。

【バラのできたものたち展】

旧古河庭園内旧古河邸での展覧会「バラのできたものたち展」では、推進



粉碎されたバラの花びらを圧搾して色素を抽出する



バラ色素で染色した衣装のパフォーマンスショー



可愛らしいモデルも登場して

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

C_バラ・プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

チームが作りだした造形素材を使った作品展と並行して、素材ミュープロジェクトと共同での取組として、卒業生細川要子氏のマダム要子ローズガーデン提供のバラから抽出した色素で染色した布から衣装制作を行い、パフォーマンス & ファッションショーのかたちで発表しました。

■今後について

今年度は、小石や紅葉などバラ以外の素材にもチャレンジし「自然素材で出来たものたち展」の開催を予定しています。



旧古河庭園内大谷美術館での展示



11月に開催されたJAM(女子美術大学美術館)ロビーでの展示

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

D_ 素材ミュープロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 15 年 4 月～継続中

参加学生：ファッション造形学科

担当教員：ファッション造形学科 小倉文子

場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの概要

日本各地の伝統繊維や染色技術に目を向け、その原材料の植物栽培から染料を抽出して染色を行う活動や、羊毛、原毛からフェルトや糸を紡ぎ、編む、織るなどして作品制作につなげる活動を行います。日本に伝わる繊維への理解と伝承を目的に学内外で発表を行っています。また、制作活動の中から新しい衣生活への可能性を探ります。

■成果

【ゆかたプロジェクト】 藍やこぶな草で染める：板染めを中心に絞り等の技法を取り入れ、木綿の無地の生地を藍で染め、反物を裁断・縫製し、ゆかたを制作しました。また、帯もゆかたに合わせてデザインし、染色して完成することができました。

【バラ・プロジェクトへの参加】 女子美術大学ファッション造形学科 3 年衣装クラスは教育 GP 素材ミュープロジェクトの活動として「バラでできたものたち展」に参加しました。

■今後(22 年度)について

相模原キャンパス構内の一角に染料の原料として古くから用いられているタデアイとコブナグサを栽培し、自然との直接のかかわりから日本に継承されてきた伝統をたどり、繊維文化を検証します。素材から衣服へと仕立て上げていく過程、そこに息づいている人の手の技を体感的に学んでいくカリキュラムです。日本の伝統的な衣服制作が現代においてどのような価値を持ちうるのかという真摯な自問の機会と考えています。また、この制作した作品をつなぎ合わせ、美術館や外部の施設で展示してゆきます。



相模原校地の畑に育った藍



こぶな草で染められた鮮やかな黄色



板染めを中心に、絞り等の技法で木綿の生地を藍で染める

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

E_ デザインミューブプロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>



出品作品：春原瑠子「SMART」

実施期間：平成 20 年度～継続中

参加学生：ファッション造形学科、デザイン学科プロダクトコース

担当教員：ファッション造形学科 原田松野

場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクト概要

デザインの価値観<ちから>をテーマに、“再生可能な自然素材を日常に”をサブタイトルとして今年度は学生が習得した技術やアイデアを活かし、女子美で生まれた素材や素材加工した材料を使って、環境問題に提案できる再生可能な生活に密着したデザイン作品（家具・インテリア・衣服・雑貨・他など）を提案しました。再利用の可能性を追求した新しい素材の研究と、その素材を活かしたより良いデザインを加えることから、女子美術大学にしかない素材づくりとデザインが融合した、環境に優しいデザインの魅力を価値あるブランド作品として、社会に発信出来る事を目的としたプロジェクトです。美術大学における学生のデザイン力を高め、社会にその価値観を広める事に賛同していただいた他大学と協力し、ヨコハマ・クリエイティブ・シティセンターにて平成 21 年 9 月 18 日～23 日の 6 日間「デザインの価値観<ちから>」の作品展示会を開催しました。

■成果

【デザインの価値観<ちから>プロジェクト】

実施期間：平成 21 年 9 月 18 日～9 月 23 日

展示会会場：ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター・スペース A

参加大学・企業他：

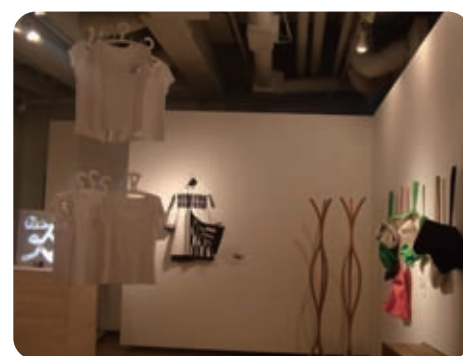
女子美術大学 武蔵野美術大学 沖縄県立芸術大学 山口県立大学

個人デザイナー 作家：

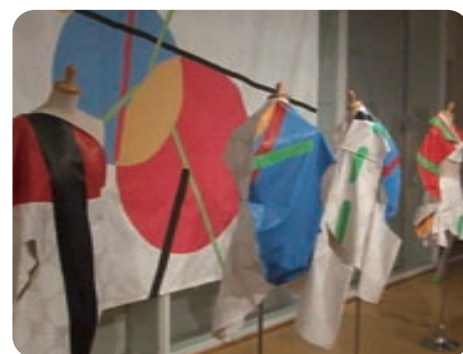
(株)湘南造園 パイン(株) (株)サイエンスロード (有)ベイサイドネット
orihinuk オリヒナック 小田原箱根伝統寄木協同組合 財団法人クラフト



制作過程のアイデア発表の様子



「デザインの価値観(ちから)プロジェクト」展示会風景



展示会風景

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

E_ デザインミュープロジェクト

<http://www.joshihi.net/brand>

センタージャパン 協同組合 横浜デザインフォーラム DC プランニング
バイスパイスデザイン

後援：公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団

女子美術大学参加学生人数は 100 名、ファッション造形学科 3～4 年次、デザイン学科プロダクト 3 年次の授業で行うプロジェクトとして学生が関わってきました。この中から選抜した作品を 20 点にしぼり、他大学と合わせると全体では合計 68 点の展示となりました。また期間中に、島添昭義（造形作家、クラフトデザイナー）山田節子（ライフスタイルコーディネーター）のお二人の講師を招き「デザインの価値観」をテーマに公開特別講演会を実施しました。

学生が創り出すデザインを日本のブランド力として社会に発信できた。
環境に配慮したプロジェクトの一貫として、新しいライフスタイルを学外で提案する機会を得た。

素材とデザインのあり方を再認識し、学生作品の向上と目的意識や役割を明確化する事ができた。

企業、作家、デザイナー、他大学との意見交換の場を共有でき、学生の活動領域の拡大にも繋がった。

作品展を横浜で実施出来た事は大きな成果に繋がりました。デザインやアートに敏感なクリエイターが集う街でもあり、古い建物を活かした景観を大切に保存している活動や家具の発祥地でもある事から、今回の、環境や社会情勢に配慮した「デザインの価値観」プロジェクトとして適した場所でした。プロジェクトに参加した学生たちからは、各大学の特徴を活かした作品に直接触れる機会を得て、卒業後の広がりや将来の目標に繋がる自信が持てた事が、大きな成果として感じられました。

■今後（H22 年度）について

今回の結果から横浜市、企業関係者に、デザインの価値観くちからプロジェクトを毎年実施していく方針で企画する協力のお願いの申し入れをしました。



出品作品：山村美紀「ゆがむバック」



出品作品：寺井菜央「折々」



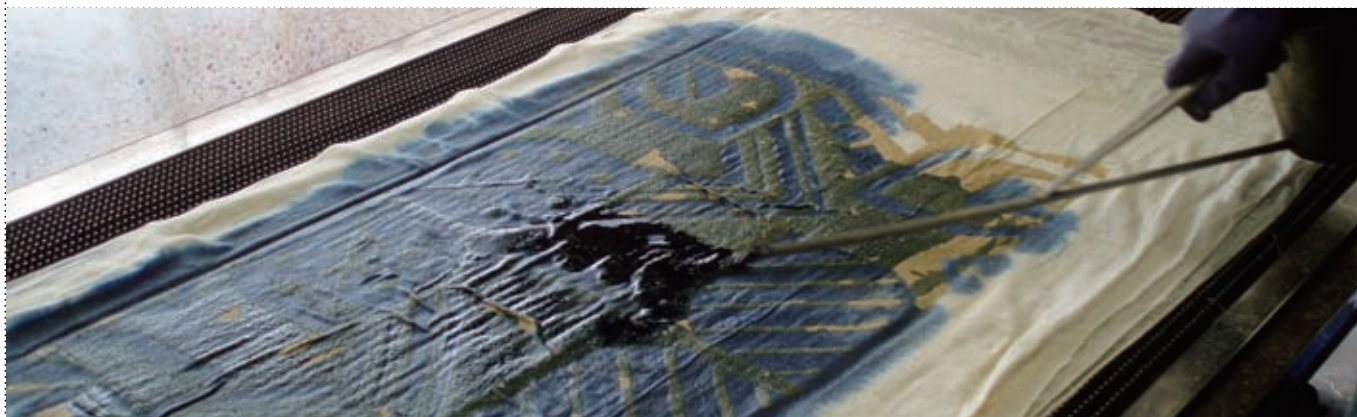
出品作品：庄子周子「時代の再生」



出品作品：新宅真実「Y-wai」

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

F_ 注染プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 18 年 4 月～継続中

参加学生：工芸学科、ファッション造形学科 その他

担当教員：工芸学科 大澤美樹子

場所：本学相模原キャンパス、その他

【注染手拭プロジェクト】

■プロジェクトの概要

ぬぐいプロジェクト 参加学生数 32 名

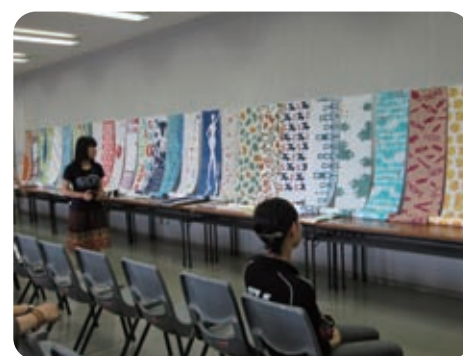
注染は主に手拭や浴衣を染める日本伝統染色ですが、この染色法を大学美術教育に取り入れているのは、本学工芸学科が唯一です。授業では主にデザインと素材を重んじた広幅の布に染色を行っています。工芸学科染の有志学生はこれを活かして、注染では不可能とされる布素材の実験を行い、社会における注染布の可能性や応用性を広げる試みと同時に、伝統技法を学び、美大生の自由で新鮮なデザイン柄による手拭の研究発表を行ってきました。

■成果

工芸学科・染の学生は、天然繊維 24 種の布に染色実験を行った後、ウールモスリンと現地視察したインドネシア手紡手織木綿布に素材をしばらく込み染色、東京と大阪の産業試験所で実用化に向けての染料繊維検査を行いました。一方では、手拭のデザインから染実習までを全員が体験した後、業者と講師を交えたコンテストを行い、総制作数 74 点の中から 14 点を選び、これを工場で染色、製品化しました。染の学生は素材を学び、絵画やデザインの学生は染独自のデザイン表現を体験し、専門家を通してデザインの社会性を学ぶことができました。



染色実験・注染の作業



業者と講師を交えたコンテスト



インドネシア手紡手織木綿布を現地視察

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

F_ 注染プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

【B 反手拭プロジェクト】

■プロジェクトの概要

b・tan んぐいプロジェクト 参加学生数 15 名

毎年、見学授業を行う注染工場には、僅かな染や織キズの為、製品にならず処分されてしまう B 反と呼ばれる手拭があります。日本伝統染色・注染と熟練職人の技術、素材の良さを考えるともったいない事です。これを美大学生のデザインセンスによって、新たに蘇らせ、社会との関わりを生み出し、製品化に向けることを目的としました。

■成果

参加学生全員で注染工場を見学し、日本伝統職人の技と製造工程や布素材を学んだ後、各自のアイディアで総数 45 点の B 反布の作品試作をしました。その後、業者と講師による講評会を開き、NPO の助言も得て、製品化に向けて 7 点を選びました。学生が試作を行いながらより質を高めてゆき、パッケージやロゴマーク等も試作することで製品の見せ方を専門家から学びました。現在、作品の製品化は進行中です。その一部は卒業生が所属する知的障害施設の協力を得て行われています。日本伝統技術と素材を活かした学生のアイディアが現代に即した製品となることは、プロジェクトに関わる全員が社会的責任の自覚をすることができると同時に喜びでもあります。



選んだ B 反をチェックする



B 反をリデザインした試作品



商品化する作品試作について参加者で検討



パッケージの検討

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

G_糸が結ぶセルビアと日本

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 21 年 4 月～継続中

参加学生：工芸学科、デザイン学科、ファッション造形学科

担当教員：ファッション造形学科 佐久間恭子 講師 新田その

場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクト概要

人々がそれぞれの環境によってどのような文化や生活を営んでいるのか、国際的貢献とは何か、また自分が出来る活動は何か、美術大学で学ぶ学生だからこそ出来ること… 絵画・染織・編・刺繍・デザイン。世界共通の表現について考察し、発見へとつなげるとともに国際的視野を広め行動するきっかけをつかむことを目的としています。

女子美術大学の学生たちの得意とするアート＆クリエイティブな感性やテクニックを活かし、国内・国外（セルビア・コソボ）へのデザイン提案、心理・造形ワークショップなどの活動を通して、国際的視野を広め行動するきっかけをつかむと共に、人と人、心と心、手仕事でつながりあって取り組み、人間関係を活性化することを目指します。

*協力

特定非営利活動法人 ACC（危機の子どもたち・希望）

セルビア現地姉妹団体 (Zdravo da ste)

■成果

・女子美祭

“おばあさんの手”（コソボ難民の団体）の作品販売（刺繍カード・しおり、手編み手袋・クッションカバー・ルームシューズ）

作品販売場所：工芸学科教室（手仕事に興味の有る方が多く販売成功）

・ワークショップ

セルビアと日本を結ぶような、ワークショップの内容、テーマについて繰



Ms.Stana



Stana with young refugees



Ethno Products：“おばあさんの手”制作の作品例

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

G_糸が結ぶセルビアと日本

<http://www.joshiabi.net/brand>

り返し意見を出し合いました。いくつかの案が候補にあがり、来年度以降の具体化に向けてつめてゆきました。

・ACC 訪問

ACC の皆さんへ、セルビアのおばあさんたちに、サンプル作品・デザイン画・残糸・試染糸・試染布などを届けていただくとともに、学生達のアイデアを伝え、作品をやり取りし合えるようお願いする。今後の作品展示日程などを考えながら、デザイン提案・作品制作交流をまとめ、進めてゆくことになりました。

■今後（H22）について

セルビア・コソボ難民のおばあさんたちが民族の伝統として受け継いできた編み物や刺繍などの技術を活かし、何度かお互いの国と国を往復しながらひとつの作品を作り上げていくことが目標。創作との関わり、一緒に作り上げていくプロセスを大切にしながら協働制作を行うことで、おばあさんたちは心の張りを取り戻し生きる喜びにつながってゆき、学生たちは国際的な視野を広げ、人と人の繋がり大切さを感じるでしょう。また学生にとって今後の制作への心の糧となり、大きな力を蓄えることが出来ると考えています。女子美祭、女子美術大学美術館（JAM）での展覧会、作品紹介・即売、講演会（ACC 代表による）を計画しています。

また、国内でのアートの活動（養護施設、母子寮の子供達への造形活動に継続的に関わる、島根の邑智中学校で毎年夏に行っているボスニアとの交換プログラム、交流ワークショップなど）に参加する予定です。

*展覧会のプラン

世界の中の小さな声に耳を傾け、この地球上にともに生きる私たちみんなが心で繋がっていくことを目指して活動している特定非営利活動法人 ACC（危機の子どもたち・希望）とセルビアの現地姉妹団体（Zdravo da ste）。ふたつの団体から協力を得て、セルビア（コソボ）の難民のおばあさんたちのプログラム「おばあさんの手」と女子美の学生たちの心をつなぐコラボレーションをプランしています。おばあさんたちの伝統的な手仕事に女子美の学生ができること「クリエイティブなデザイン提案」を活かして制作される作品展示、ワークショップの開催と同時に、セルビアの様子やおばあさんたちの作品制作風景などを紹介パネルなどにまとめて展示します。可能であれば作品の即売も行っていきたいと考えています。



デザイン提案の試作：ゆわかれたメッセージ



女子美生のデザイン提案



Aleksinac workshop：セルビアでのワークショップ風景



染糸・染布などの実験サンプル、ACCの協力を得てセルビアへ

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 環境論 +

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 21 年 9 月～平成 22 年 3 月

参加学生：デザイン学科、工芸学科、メディアアート学科、洋画学科 19 名

担当教員：デザイン学科 赤沼國勝

場所：本学相模原キャンパス その他

【実施プロジェクト】

- * baishakhi
- * 地球擬人化計画
- * キャップリン
- * アンケエコ
- * 案山子

講義科目である「環境論」では双方向性の授業を行っています。その特長のひとつには学生に自分の得意な表現手法を使って環境問題の解決案を提案するという実践的な内容を含んでいます。受講学生の中には、授業期間終了後も自分の活動を続けたいとする意欲の高い学生もおり（本年度団体数 32 団体）、その学生達に教育 GP として教育面、資金面で支援しようというのが「環境論+」の主旨です。

学生達はこれらの支援を受け、個々の活動とは別に週一回の「環境論+」の全体会議を実施し、自分たちの内容をより確かな形にしてゆくための意見交換を行いながら半年間活動を進めてきました。最終的にはできあがった作品をシュミレーションして確認します。さらに改良点など整理して活動の内容を冊子にまとめて終了となります。半期の活動を通じ、学生達の活動は自らの発案時から、時間が経てばたつほど内容が深まり、モチベーションは増していきました。またデザインの重要なポイントを「環境」という限られたテーマの中ではありますが、深く調べなければならないことや、他に任せられない責任、冊子制作のために印刷発注や依頼調査など実社会に接して活動することなど授業では学べない重要な事項を短期間で経



baishakhi：試作したバングラディッシュの皮を使った作品



baishakhi：試作品例



バングラディッシュの留学生も交えてミーティング

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 環境論 +

<http://www.joshibi.net/brand>

験し、身につけることができました。美術系学生にとって良い機会が与えられ、同時に社会に通用する実績が得られました。

■各プロジェクト活動の成果

【baishakhi】（ボイシャキ）

□プロジェクトの概要

本プロジェクトは、環境問題が人と人との経済的格差（＝南北問題）から始まっているという観点から、そのことを知ってもらうためのきっかけづくりとして、発展途上国であるとされているバングラデシュの人々と共同で、革製品の生産から販売を行うプロジェクトです。

商品の良さはもちろん、その裏側に隠されたバングラデシュの人々について、経済的格差について、少しでも多くの人に伝えていきたいと考えています。バングラデシュ側で欠けているデザイン力を補うために私たち女子美術でデザインを行い、バングラデシュで商品の製造を行うことが目標です。革製品の生産を平等な立場で進めていき、お互いの能力を活かし、より良い商品作りを目指します。

今年度の具体的な活動は、材料代や商品製造に要する時間、輸送費、税関等のデータ収集、革製品におけるマーケティングを行い、本格的な活動は来年度以降となっています。

□成果と今後について

参加学生は、専門的な知識を持つ企業や卒業生と接し、バングラデシュでの革素材における現状や、革製品のデザイン、制作、マーケティング活動等について学びました。また製品そのものの知識だけではなく、日本とバングラデシュとの国交関係や貿易等の知識が、非常に重要であることを再認識しました。ブランドイメージを明確にし、今後の商品化に向けて、手作りサンプルを元に一般の人への市場調査をおこないました。DM や企業向け冊子を制作し、ホームページを立ち上げ、本プロジェクトの活動内容を公に発信しています。現在、活動を支援していただける企業を探しています。baishakhi では、革の知識、国を越えた人との交渉力、ニーズと制作を考慮したデザイン力、臨機応変なマーケティング力が、重要な要素となることを踏まえ、今後も活動を継続していきます。

baishakhi とは：バングラデシュのお正月（4 月 14 日）を意味し、この日はどんなに貧しい人でも幸せな 1 日を過ごすそうで、私たちは格差がなくなり幸せな 1 日が少しでも多くなるよう、これをプロジェクト名としました。

* ホームページ <http://2style.jp/baishakhi/>



baishakhi：女子祭学内フリーマーケット会場にて市場調査



baishakhi：職人さん訪問



baishakhi：製品の試作中

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 環境論 +

<http://www.joshibi.net/brand>

【地球擬人化計画】

地球環境問題をより良く理解してもらいたい。そのためには文章やポスターではなく、得意としているグラフィック的表現（特に漫画表現）であれば、より多くの人々に理解してもらう事が出来るのではないかと考え制作にあたったプロジェクトです。地球そのものを人間にみたと、樹が伐採される事は頭の毛が禿げるなどと云った形で身近で解りやすく表現した作品です。

内容は WEB にして意見などをもらい、修正し完成させてゆきました。最終的には絵本にしてより多くの人に見てもらい、さらにこの事をより多くの人に知ってもらうためのフライヤーや DM など自発的に勉強してデザインを行い、印刷まで実行しました。

「地球さん」とその友達のイラストを大まかな説明と共に表面に、裏面にはサイトに掲載している漫画から数コマ取りだして興味を持ってもらえるようなキャッチコピーのようなものをつけました。

活動を知ってもらえるよう母校の新潟県立新潟高校へ、DM の配布をお願いしました。

* ホームページ「ひと目でわかる地球の“やばい”」

<http://tqsan.web.fc2.com/>

【キャップリン】

ペットボトルキャップを集めるという主旨で活動している団体数は沢山存在します。学生達は自分たちのデザイン力をこれに活かさないかということからこの活動が始まりました。目を引くか、ペットボトルの廃棄と蓋の分別をいかに面倒なくやってもらえるか、デザインのクオリティの高さは？収集しやすさはどうか、など機能面でのコンセプトを大切に、その上 800 個の蓋がひとりの命を救うという現実をデザインに表すといった女子らしいテーマも設けて計画を始めました。

第 1 案はエコグッズデザインコンペに応募。後日改良案を第 2 案として作製しキャンパス内の 2 カ所に設置し、現在までに 5000 個のキャップを回収しました。同時に学内にてアンケート調査など行い分析しています。

今後は集めたキャップを使ったイベント（イベント後に医療団体に送付予定）を行い今後の活動の喧伝を行う予定です。



地球擬人化計画：漫画やビジュアルメインで伝える冊子



キャップリンの事例



参加学生たち、真剣にミーティング風景

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 環境論 +

<http://www.joshibi.net/brand>**【アンケエコ】**

環境問題についてより多くの人に理解をしてもらう事や知ってもらうといった方法は様々有りますが、質問を投げかけることによってはじめて人はそこで考え、多人数が揃えば話し合うことができ、深く考える機会も与えられるでしょう。このような想定を前提としてアンケート方式の教材を考えました。環境の問題点を整理して、絵などを多用してやさしい質問形式で問いかけるように工夫しています。

アンケート調査とは、調査目的、項目、対象、規模、時期、方法（1 留置調査法 2 集団調査法）など詳しく決めなければならないことを講義の中から学びました。

『その場ですぐ出来る・分かる』にこだわった理由は、アンケートは結果が見えにくいという難点があったからです。それを解決するために、模索して行く中で今までに無かったアンケート方法に至りました。また、アンケートの可能性について知ることが出来たり、項目を考えるうちに「身近で出来るエコ」を知ることが出来ました。

こどもも大人も区別なく、質問に答えることで多くの人が自分の立ち位置を知ることになるでしょう。そのこともアンケート形式のメリットであると考えています。

【案山子】

こどもたちに環境問題をわかりやすく、楽しく学んでもらうことを目的とし、さらに環境問題に自ら積極的に取り組んでもらう意識作りをする有効な方法として環境ゲーム「森林化政策」造りを考案しました。

デザインを学んでいる自分たちが環境問題に向き合ったとき何が出来るだろうか？という視点から双六のようなゲームを新たに造り出し、ゲームによって楽しく遊んでいるあいだに環境教育が受けられるというのが活動の発端です。

こどもたち（小学生から大学生まで）を対象としており、ゲームの難易度を変えることができるよう設定しました。サイコロを振って進み、そのたびに環境汚染物質（擬人化してある）と対戦やクイズ合戦をして一進一退しつつ最後はゴールする内容です。現在までの活動は様々なゲームの調査活動や試作品製作で、今後それによるシュミレーションや改造など行つてゆき最終製品としての完成する予定です。1 年生が主体となっているプロジェクトでしたが、ボードゲームの説明書やパンフレットの制作は、印刷会社とのデータのやりとり、打ち合わせなどを重ね暗中模索の中で進められ、結果的には予想以上の仕上がりとなり、有意義な経験でした。

* 案山子ブログ <http://kakashi2010.blog48.fc2.com/>

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I_ にこぶん

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 21 年 4 月～継続中

（平成 21 年 12 月 26 日・エココン 2009）

参加学生：芸術学部各学科 学生数合計 48 名

担当教員：デザイン学科 赤沼國勝

【実施プロジェクト】

- * オーストリッチーズ
- * わたけん
- * GM

「にこぶん」とは以下に紹介する学生の自主的活動である 3 団体が手を組み互いに学びつつ活動を進めている活動体です。「にこぶん」は母体での会議とは別に週 1 回の頻度で話し合いを行い、自主企画の計画立案、実行方法、振り返り、会計処理などを独自に進め、母団体に持ち帰り活動を深める一助にしています。

「オーストリッチーズ」は平成 19 年度に活動を開始しており、その 1 年後に発足した芸術学科学生を主体とした「グリーンマップ (GM)」が他学部の学生達も交えて活発な活動を進め、本年度に発足した「わたけん (WATAKEN)」を交えて「にこぶん」として一体化しました。

「にこぶん」としての独自の活動は新入生の勧誘活動に始まり、県立相模台高校との高大連携の一貫であるびあびあ事業への主体的参加、学外研修会参加、女子美祭企画参加、全国大学生環境活動コンテスト（エココン 2009）への参加、他大学活動との連携（例：千葉大モミチャンズの渋田プロジェクト）など活発に活動を行っています。

【にこぶんの成果】

会議、合宿、文化祭やエココンへの参加など多岐に渡った活動から一部紹介します。



相模原市主催の「さくらナイトフェスタ 2009」に参加



カレンダー作りワークショップを通してにこぶんの活動を紹介



にこぶん各プロジェクトメンバーでの合宿会議

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I_ にこぶん

<http://www.joshibi.net/brand>

・相模原市主催の「さくらナイトフェスタ 2009」に参加

日時：平成 21 年 4 月 4 日（土） 13：00～21：00

場所：相模原市役所本庁舎本館前（さくらナイトフェスタ 2009 会場）
第 36 回相模原市民桜まつりのフェスタ会場に参加、カレンダー作りワークショップを通してにこぶんの活動を紹介しました。開始とともにたくさんの（特に女の子が）方が参加してくださり大盛況でした。

・ピアサポート会議への参加

日時：平成 21 年 7 月 29 日（土） 15：00～16：00

場所：女子美術大学 142 教室

にこぶんと神奈川県立相武台高校の連携について相武台高校の校長先生がプレゼンテーションされました。

また、にこぶんへの高校生の参加についてや、グリーンマップ（GM）に参加した生徒の感想など、教育委員会の場を借りて意見交換できました。

・女子美祭への参加

日時：平成 21 年 10 月 23 日（金）～25 日（日） 8：00～13：20

場所：女子美術大学 2 号館ロビー、学校内の各地

毎年行われている女子美祭で、今年新たなエコ企画として美祭実行委員の完全バックアップでにこぶんの展示、イベントを行いました。美大×エコを提示することで、モノを消費して制作活動をする美大生の発想転換や意識改革につなげたいという願いが込められています。

1. 成果報告：活動報告・PR を兼ねた展示

2. バルーンリリースイベント

300 個の風船を来場者に配布し、約束の時間と場所を伝え、参加者には時間になるまでその風船とともに自由に行動していただき、時間になったら一斉に風船を放ってもらうという試みです。同じ風船を手にして持ち歩くことで「約束」を共有することができ、人との繋がり（コミュニケーション）を感じて欲しいという願いをこめました。風船、紐、おもり、ガス等は全て環境にやさしいもので、風船と紐は土に返るものを使用しました。カウントダウンから放流、風船が見えなくなるまで、その場が一体となって盛り上がりました。風が強くすぐに見えなくなりましたが、青い空に赤い風船が映えて、とてもきれいな光景でした。

当日の夕方に神奈川県伊勢原市の方と、27 日に神奈川県秦野市の方から風船を受け取ったという内容のメールが届きました。その方達にはバルーンリリースの当日の様子を紹介したブログをメールでお知らせしました。



女子美祭学生ロビーにて、美大×エコ「お針子ワークショップ」

女子美祭「バルーンリリースイベント」
300 個の風船を一斉に放つ

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I_ にこぶん

<http://www.joshibi.net/brand>

3. お針子ワークショップ

いらなくなった服やはぎれを切ったり縫ったりしてつなげてゆき、プロミシングを作りました。作る際に願い事を込めてもらい、前に作った人のリングにコメントをして繋がりを感じてもらうことで、同じ空間で世代を超えて時間を共有し、コミュニケーションを深めてもらうことを目的にしました。同じ机で相席になった方たちも自然と会話が生まれていて、理想的な空間ができていました。

・エココン 2009(全国大学生環境活動コンテスト)への参加

日時：平成 21 年 12 月 26 日(土) 7:45 ~ 18:00

場所：立正大学大崎キャンパス

エココンは環境に関する様々な分野で活躍中の社会人、全国各地から集まった学生、見学者による公開選考を通じ、学生の環境活動を様々な観点から評価、表彰するコンテストです。58 団体が 1 グループ 7 ~ 8 団体の 8 グループに分かれて行い、各グループは 5 分間のプレゼンテーションを行います。

私たちは手描きのイラストや WS の写真をパワーポイントにし、その前でナレーターとメンバーが劇のように活動を紹介するプレゼンテーションをしました。にこぶんの 3 団体共通の想いを最初に説明し、その後にオストリッチーズ、WATAKEN、GM の順に成果物を持って見せながらファッションショーのように紹介してゆきました。

今回はにこぶん発足 1 年目でまだまだ私たち自身がにこぶんを把握しきれていない点も明らかになり、非常に学ぶことが多かったです。これをふまえ、今後さらに芯の強い「にこぶん」として活動を進化させてゆきたいと考えています。



女子美祭イベント後の反省会議



エココン 2009(全国大学生環境活動コンテスト)への参加

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I-1_ オーストリッチーズ

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 19 年～継続中

参加学生：芸術学部各学科

担当教員：デザイン学科 赤沼國勝

協働連携先：他大学学生、

ダチョウ牧場（スマイルオーストリッチーズ）など

場所：本学相模原キャンパス、相模原市立小学校 その他

「地域を結ぶコミュニケーションツール」という活動目的のもと、相模原市が農業特区としてダチョウ牧場を開始して以来、相模原市より牧場からの産業廃棄物である卵の殻（実際には販売品）を利用できないかとの打診がありました。それに応えた学生達が植木鉢にしてみたいと発想して活動は活発化しました。

小学生に地域産業のことや環境問題について知ってもらい、自身で思い・考え・自発的に行動に移すきっかけを作りたいという思いをもって活動しています。

今年度より高校生も加わり環境教育、地場産業のこと、緑のことなど大学生と共に学び合い子供達へのファシリテーションについての研究や実践をともに行ってきました。普段の授業では学べない内容を学生も生徒も手にすることが出来ました。特に小学校では活動を授業に取り入れていただいたため、学校での正規授業が普段より活発化してとても良い効果があったという小学校側からの報告もありました。

にこぶんとした活動とともに、オーストリッチーズとして何が出来るのか、話し合いを行っています。大きなイベントがある直前には、毎日のように話し合いを行ってきました。

来年度も新しいメンバーを受け入れ、ワークショップを継続するとともに、足尾銅山 NPO や塩尻市との連携を視野に入れた活動予定があります。

* オーストリッチーズ <http://ostriches.web.fc2.com/>



準備したパフォーマンスの息もぴったり



小学生、高校生などの共同ワークショップから様々なことを学ぶ



プロジェクトメンバーでミーティングを繰り返す

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I-2_ わたけん

<http://www.joshibi.net/brand>

相模原校地和棉の畑を作るため、3 種の肥料を混ぜ、土づくりから

実施期間：平成 21 年 4 月～継続中

参加学生：工芸学科、相武台高校の生徒

担当教員：大学院修士課程デザイン専攻 赤沼國勝

場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクトの概要

今年度発足のワタケン（棉研）は日本特産の棉（和棉）がなくなりつつある事を懸念した大学院生の発案で活動が始まりました。土作りから収穫、さらに糸から布になるまでの 1 年間を、「はぐくむいやし」をテーマに活動しています。特に現在世界的に主流となっている洋棉産地（とりわけインド）での農薬の大量使用は素材の安全性や生産農家の人の健康上の問題など懸念材料が多くなっています。単に生産性の悪さのために消えつつある和棉の持つ風合いや肌合いの良さなど、洋棉にはないすばらしい点に気づいた学生が、それを自分の手で育てて生産性についての問題や和棉の良さを実体験しながら作品化するという内容で計画は動き始めました。

■成果

大学に畑地を提供してもらい、土作りを手始めにデータロガーを設置して気象条件を記録分析する手はずを整えました。5 月には数種類の棉のタネを植え実際に栽培を行いました。以来 10 月の収穫まで観察、記録を行い、秋には収穫した棉を素材にして、ワークショップを実施しました。

畑仕事をしてゆく中で、ざらざら、ふわふわ、さらさら・・・したワタや土に触れることは、自分の中の新しい発見に繋がります。わたけんは、オーガニックコットン を育てています。棉に害のない木酢で虫を退治したり、棉の芽を食べてしまうナメクジはビールの罌をしかけてとらえています。今年は、根切り虫対策対策にダチョウの卵の殻を使う予定です。

□わたけんに参加した高校生の感想より

・間引いた苗をいただいて、家族でのコミュニケーションのきっかけを得



相武台高校の生徒たちと観察開始

ワークショップ：大豆・水・石灰で作った
豆汁＋顔料を和紙に塗る

はじけたコットンボール

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I-2_ わたけん

<http://www.joshibi.net/brand>

ました。それから棉という植物の後ろ側にある歴史など、最初の疑問の答えだけでなく、たくさんの忘れられない事柄がつまっていたと感じました。

・今回、わたけんをとおして、棉の出来かたや歴史、自然とのふれあいについてなど、色々と学ぶことができました。活動に参加して本当に良かったです。

□わたけんより

棉が私たちに教えてくれたことは数多く、環境問題を考えるおおきなきっかけになることに驚かされました。便利な世の中で生活していても、事前によって私たちは生かされていることを私自身が学ばせていただいた一年でした。

■今後（H22）について

実験段階を終え、来年度は日当たりの良い畑地を大学から提供受け本格的な活動を続行する予定です。畑がある女子美で、女子美生を対象としたワークショップを行ってゆきます。

*わた -wata- につき

<http://watawata33.exblog.jp/>



うまれてきた棉



棉をよって糸をつくる



自作した織機を使い、よった糸と端布、紙布を織り込んだ布



出来上がった布

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I-3_GM

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年～継続中

参加学生：芸術学部の各学科 1～3 年生

担当教員：芸術学科 佐藤美智子 デザイン学科 赤沼國勝

場所：本学相模原キャンパス その他相模原地域全般

■プロジェクト概要

20 年度の芸術学科の 2 年生を対象とした授業の「ワークショップ研究」ではワークショップの実践例としてグリーンマップを取り入れています。その受講学生たちの有志が、授業後も引き続いて活動したのが GM の始まりです。この活動は芸術学科の学生にだけに留まらず、特にオーストリッチーズが「エココン 2008」に参加した際に、応援参加した他学科生たちにも広く受け入れられ、活動する学生数が飛躍的に多くなりました。

20 年度は大学近傍の小学校 1 校、21 年度は同 2 校に対してワークショップを実践しました。本年度の活動は高校生も交え、20 年度と同様の形式で、生徒が普段通い慣れている学校までの道のりを改めて見直してみました。新たな発見や気づきから、改めて他の子どもたちや地域のことを知るなどの効果をねらった活動となりました。

■成果

これらの活動から、参加学生は「知る」「思う」「伝える」というサイクルを導き出し、GreenMap を単なるエコ活動ではなく、他者や自然への思いやりを導き出す自発的なエコ活動へと展開させました。

来年度は江戸川区との連携も視野に入れた活動も予定しています。



普段歩き慣れている通学路を再発見する



ワークショップの企画

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

J_ 壁塗りプロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 6 月 2 日～9 日

参加学生：芸術学部各学科

担当教員：デザイン学科 横山勝樹

協働連携先：(株)山共建設 山本寿仁氏

場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクトの概要

塗壁は日本の伝統的な建築工法でしたが、近年ではより扱いやすい工業製品が普及し、街中で土壁を目にする機会は極めて少なくなってきました。しかしながら吸湿性に優れた土壁は、湿潤な日本の気候にあった自然素材です。また日本各地には、その土地特有の土の色があり、地域の固有性を創り出す上でも、工業製品にはない価値が現在でも生きています。このような土の造形素材としての可能性を実際に体験することが本取り組みの目的です。初日は、土にもさまざまな色が存在すること、その土と混ぜる繊維材料（すき）の種類や量によってヒビの入り方など表面の風合いが変わってくることを、実物サンプルを見ながら確認しました。そして各自、用意された土とすきから思い思いの材料を選び、板状の下地材（30cm角）に、コテあるいは素手で塗りました。二日目は一週間後に行き、まず自分たちの塗った土が乾いてどのように変化したのかを確認しました。その後、各自が自由に選んで持ちよってきた小物を下地として利用し、土の造形素材としての可能性を実際の制作を通して確認しました。

■成果

普段なにげなく見ている自然の土にも、さまざまな色が存在することに、初めて気づいた学生も多くいました。またすきや下地材などの工夫によって、土はさまざまな表情をつくりだすことが出来ることも、新たな発見となりました。土をいじること自体に、人工素材とは異なる楽しみがあることも実感することができました。



自然素材の土にも様々な色がある



道具や材料、原料（株式会社 山共建設提供）を確認する



土の造形素材としての可能性を確認しました

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

K_ 素材環境教育プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年度～継続中

参加学生数：芸術学部学生 21 名 近隣小学校の児童有志

担当教員：芸術学科 坂田勝亮

場所：本学相模原キャンパス 1 号館 5 階を中心に、必要に応じて随所

■プロジェクトの趣旨・目的

美術教育において素材と環境の関係を理解させることは重要な課題のひとつであると考えています。本プロジェクトは、素材と環境との関係を学ぶためのツールとして子どもたちに人気のあるトレーディングカードゲームを開発することを目的としました。従来のカードゲームに多くみられる破壊や戦闘といったテーマではなく、美術と環境というテーマに沿って素材から作品を作り上げていく創造と制作の過程を競い合うゲームとしました。デザインは男子だけでなく女子にも親しみの持てるものとし、楽しく遊びながら自然と知識が身につくカードゲームを開発しました。

■成果

今年度は、昨年度の成果を基に美術における素材・環境教育の可能性を検討するとともに、その将来的な必要性を確認して、カリキュラムとして実施するための諸問題について考察を加えました。

・カードゲームによる効果の測定

地域の小学校の協力により定期的にカードゲーム大会を開催して内容の習熟をうながし、1～2 週間おきに実施したワークショップでは昨年度試作したカードゲーム 'Master Piece' の効果測定を行いました。

具体的には、ワークショップを実施する前に素材・環境と美術に関わる知識についてアンケート調査を行い、開始時点の児童の知識量を測定、ワークショップ 5 回目開催後に、再度知識調査を行いました。

・知識量測定の結果

一定期間のゲームプレイの前後では知識の有意な向上がみられ、美術を通



カードゲームで遊ぶ



素材から作品を作り上げていく過程を競い合う



定期的なゲーム大会を通して内容の習熟を促す

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

K_ 素材環境教育プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

して素材と環境の知識が増大したことが明らかとなり、大きな教育効果を上げることがわかりました。また、立体や服飾などの領域では成績の向上が大きかったのですが、相対的に絵画などでの向上は小さい結果となりました。これは膠や顔料など、作品を制作してゆく素材の多くが、小学生には馴染みの薄いものだったことに起因していると考えられました。

ワークショップ以外にも、同様の試みをおこなっている他の研究者や企業とも交流し、知識を深めました。

また、文献などによりこれまでに行われてきたさまざまな試みや、新しい試みの方向性も検討をおこなってきました。参加した学生は、初等美術教育における素材と環境に関する項目の重要性を再確認し、カードゲームという教材を通して取り組むことで自ら工夫して教育効果を挙げることを学びました。

・新しいカードゲームの完成

これらのワークショップや調査結果より、試作カードゲームの改善が検討されました。これは素材や作品に関する領域の拡大や、ゲームの進行やルールのわかりにくさ、さらには実際にプレイした児童からの提案に基づく新しい試みなども検討され、新しいカードゲームが完成しました。これは従来のルールを踏襲し、教育効果を確保するとともに、さまざまな美術領域における事例を取り入れて、より広範な知識の習得を可能とするものと予測しています。

■今後（H22 年度）について

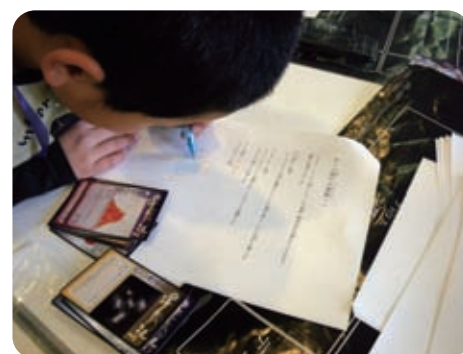
新しいカードゲームをもちいて、再度効果測定を行う予定です。



トレーディングカード



繰り返しゲームを楽しむ



参加児童からの提案に基づいて再検討

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 7 月～継続中

参加学生：工芸学科、県立新磯高校の生徒

担当教員：工芸学科 吉田潤一郎

場所：本学相模原校地、県立新磯高校陶芸の実習室・釜場

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、陶芸をととして大学教育と高等学校教育との連携を深め、地域の教育環境に貢献しようとするものです。授業協力などを通じ、高校生と大学生の交流を図り、お互いの発展的関係を目指しました。今年度の主な活動方針として以下の 3 つのポイントに重点を置き、進めて行きました。

1. 授業協力

新磯高校の先生方から「生徒の発想が豊かになった。」という報告がありました。新磯高校への授業協力としては、現役の美大生がレクチャーをして、自分たちの発想と制作方法を伝えたことが効果的だったようです。また、美大生が現在の作品だけでなく高校時代にまで遡って年代ごとに作品解説を行ったことが、現役の高校生にとって現実味を感じることが出来たのだと思います。

本学 3 年次の講評会を合同で行ったことは、3 年次学生にとって良い効果をもたらしました。学生は、専門外の人々に自分の作品解説を行う場合、用語の使い方や実例の示し方に気を配らなければ相手に話が理解してもらえないことを実感できました。この経験は、美術系以外の人々と広くコミュニケーションをとる場合の方法を考えていく良いきっかけとなりました。

2. 大学生と高校生の交流

美大生によるレクチャーでは後半に雑談形式を取り、若者どうしのことばで交流ができるようにしたことが効果的でした。高校生にとっては、4 歳



新磯高校先生のレクチャー



3 年次合同講評会



3 年次合同講評会

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

ほど年上の大学生と身近に話が出来たことは、自分の近い未来を考えていく上で刺激になったのではないのでしょうか。

作品鑑賞では本学美祭で染・織・陶・ガラスの作品制作者と高校生たちが広く交流を持つことができました。陶芸以外の分野の学生と話すことは、陶芸と他の分野との違いを具体的に理解するのに役立ったと思います。

3. 指導内容の相互理解

新磯高校の先生方によるレクチャーで、高校での美術教育のあり方と現状を教えていただいたことは、教職を希望する学生にとって大変貴重なことでした。また、それ以外の学生たちにとっても、大学という場を相対的に見るための良い機会となりました。

高校生には、専門を学ぶことの雰囲気伝えることができたと考えています。新磯高校の先生方からは、普通高校と美大との陶芸教育の違いについて貴重なご意見をいただきました。

■成果**【第 1 回 打ち合わせ】**

日時：平成 21 年 4 月 30 日（木） 16：30～19：30

場所：女子美術大学、工芸学科研究室

平成 21 年度活動予定を検討、前期活動計画を立てました。

【第 2 回 新磯高校の先生方からのレクチャー、打ち合わせ】

日時：平成 21 年 6 月 16 日（火） 14：00～17：00

場所：女子美術大学 131 教室、工芸学科研究室

パワーポイントを使って「普通科高校における陶芸授業」についてレクチャー、その後学生との質疑に応じていただきました。また、今後の活動内容の確認と検討を行いました。

【第 3 回 女子美大学院、工芸（陶）の学生によるレクチャー】

日時：平成 21 年 7 月 1 日（水） 13：25～17：00

場所：神奈川県立新磯高等学校 陶芸実習室

本学大学院生によるスライドレクチャーを行いました。ひとりの学生が中学時代から現在に至るまでの作品をスライドで写しながら、美術教育の中でどのように成長してきたかを示した上で、最近の作品の発想と制作技法について、実物を見せて説明しました。最後に、教員間でレクチャーの方法と効果について感想を述べ合いました。



大学院生によるレクチャー



大学院生によるレクチャーの様子



発表に生徒も聞き入る

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

【第 4 回 女子美陶コース 3 年次の合同講評】

日時：平成 21 年 7 月 21 日（火） 13：00～17：00

場所：女子美術大学、工芸学科陶コース実習室

本学 3 年次の前期講評会に新磯高校が参加しました。3 年次学生の 4 月～7 月までの進展状況を一人ずつ提示し、それに対する意見の交換を行いました。本学の 3 年生は、自分の制作テーマや制作プロセス、作品の変遷などについて作品をもとに高校生に説明しました。説明後、高校生の質疑などにより、自分の説明が的確であったかを確認しました。高校生にとっては、美術を専門に学ぶという具体的な状況に触れて、高校での美術活動についてもう一度考えてみる機会となりました。出席者全員にそれぞれの学生作品についての簡単なレポートを書いてもらい、専門外の人たちを含めたかたちで、作品の良い点と問題点を指摘してもらいました。



作品について質疑応答する

【第 5 回 女子美陶コース 4 年生によるレクチャー】

日時：平成 21 年 9 月 1 日（火） 13：10～16：30

場所：神奈川県立新磯高等学校 陶芸実習室

本学 4 年次学生によるスライドレクチャー。学生の高校時代から現在までの作品をスライドとファイルで見せ、それぞれの時点での制作について説明しました。その後、作品（実物）を見せ、質問に答えました。自分の発想でテーマを決めて、技法を工夫しながら作品を完成させるという、制作プロセスを伝えました。



4 年生による作品プレゼンテーション

【第 6 回 女子美祭作品鑑賞】

日時：平成 21 年 10 月 24 日（土） 10：00～12：30

場所：女子美術大学 相模原校舎

新磯高校の先生方と生徒が女子美祭を見学しました。女子美祭では授業で制作した作品が学年別に展示されているので、本学の美術教育を作品を通して理解していただきました。特に工芸学科の展示場では本学学生が解説をし、高校生が制作者とじかに触れ合う機会を作りました。



4 年生による作品レクチャ

高校生と大学生が陶芸を通してコミュニケーションをとり、美術を学ぶことについて自発的に考えを深めていくようになりました。高校生にとっては、大学生の作品と考え方を本人から生で伝えられることによって、数年前の自分の未来を実感を持って感じ取り、考える良いきっかけになったと思います。大学生にとっては、自らの考えをわかりやすく他者に伝えるということについて、実践的に学べる良い機会となりました。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

■今後(22 年度)について

今後の課題としては、1. 参加人数をふやす。2. 共同制作の可能性を探る。3. 高校生がプレゼンテーションをする。など、検討していこうと思います。また、今年度にあまり話し合えなかった設備面については、来年度に検討していきたいと考えています。

■付記

11 月から 3 月までの期間に活動が計画されなかったのは、新磯高校がこの時期に移転準備で忙しくなるためです。新磯高校は、来年度から相武台高校と合併し、相模原青陵高校という新しい高校になります。その際校地が現在の相武台高校になるため、陶芸窯などの大掛かりな設備移転をしなくてはならないので、11 月以降の活動は行わないことになりました。

尚、合併後も引き続き協力関係は継続し、来年度からは、相模原青陵高校との陶芸コラボレーションを行うことになりました。



新磯高校生と共に女子美祭を観賞

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

M_ 環境マッププロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 11 月～平成 21 年 3 月

参加学生：芸術学科 2 年生

担当教員：芸術学科 佐藤美智子 デザイン学科 赤沼國勝

場所：本学相模原キャンパス、その他相模原地域全般

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、芸術学科 2 年生の授業「ワークショップ研究」として 2 年目となる取組です。普段見過ごしがちな小さな発見を「グリーンマップ」手法を使い、地域を歩き、観察し、様々な視点を持って「地図」を作成しました。授業内で行われたワークショップを、授業後に考察し、1 冊の冊子にまとめあげるという内容で進められてきました。

■成果

【ワークショップ研究授業】

・ワークショップ企画の流れ

1. グループで担当するコースを決める
2. コースの下見
3. ワークショップのテーマ・コンセプトを決める
4. ワークショップに必要なツールを作る
5. 同じコースのグループ同士でワークショップを行う
6. ワークショップを行ったグループにインタビュー
7. 改善案・地域に向けて配布する広報マップについて考案
8. 中間発表
9. 改善案企画書・配布広報マップの作成
10. 全体発表

ワークショップ研究の授業では、まずワークショップに参加する側を体験してから、企画を行います。企画を行うに当たっては、美術館学芸員の方



グリーンマップとは？



ワークショップを行った相模原校地近辺



アイマスクをつけて歩き、新しい発見を探す

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

M_ 環境マッププロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

から美術館ワークショップについて、ファシリテーターの役割、ワークショップとファシリテーターにとって大切なことなどを映像やスライドを見ながら学びました。さらにワークショップの企画に重要なグリーンマップについて学び、1 グループ 6～7 人の 6 グループを作りました。ワークショップコースを下見したうえでテーマやコンセプトを試案し、各班ごとにワークショップを企画しました。実際にワークショップを実施したのは、体験者の意見を取り入れた改善案を企画することで完成度を高めました。また、地域に配る広報ツールを製作、改善案をもとに最終発表を行いました。

【グリーンマップ広報活動】

広報メンバーにより、実際にグリーンマップを作成しました。冊子の全体的なコンセプトは、見やすく手に取りやすいようなデザインにし、子供が見ても楽しめるような冊子作りを目指しました。イラストも、動物やポップなものにし、親しみやすさを表現しました。

以上の活動から参加学生は、コミュニケーションの大切さ、判りやすく他者に伝えることの難しさ、計画の重要性を学びました。さらにワークショップを自ら企画することにより、その可能性の大きさを実感。また、他者の意見や価値観に触れ、互いに刺激し合うことで、新たな答えを導き得ることができました。このようなことからワークショップ手法による役割と効果の多様さにも改めて気付かされることとなりました。



ワークショップを実施、作成したグリーンマップ



ワークショップ結果を考察して出した改善策



ワークショップのために各班が用意したツール



ツール「五感をそれぞれ表すアイコンカード」

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

N_ 環境ポスターコンペプロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月

参加学生：芸術学部の各学科

担当教員：メディアアート学科 川口吾妻

場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクトの概要

アートやデザインを学ぶ学生に環境問題をテーマとしたポスター制作を呼びかけることにより、意識、理解を深めると同時に、プレゼンテーション能力や広告技術向上を目指す教育プログラムとして実施しました。

■成果

「生物多様性」環境ポスター制作ワークショップ

昨年第 1 回「IAA 電通世界学生ポスターコンペティション～気候変動～」では、世界 13 カ国・地域から 145 点、本学より 46 作品の応募作品があり、世界グランプリや地域最優秀賞が決定しました。

本学美術館ロビーにおいて、受賞作品と女子美生作品の報告展を開催。他国の学生が、テーマをどのようにとらえ表現したか、それぞれの個性や表現の違いを知り、日本がいかに環境問題に対する意識やとらえ方が浅いかを学びとり、考察する結果となりました。

昨年度に引き続き、「生物多様性」をテーマにポスター制作を学生に呼びかけ、今年度は約 40 点の作品が集まり、コンペティションへ応募。ポスター制作を通して、環境意識、理解を深めました。



応募作品より



応募作品より

女子美術大学 | 文部科学省「平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

<http://www.joshibi.net/brand>

平成 21 年度報告サイト PDF 版

2010 年 4 月作成

Copyright 2010 JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved.

女子美術大学 相模原キャンパス：〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台 1900 杉並キャンパス：〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
お問い合わせ：教育研究事業部 042-778-6144